



企業経営学科

浅井耕平君（2014年4月から伊藤忠商事に勤務予定）



全力少年

地元愛知県の商業・情報処理の高校から、滋賀大学に進学してきました。大学在学中に、「SIFE（現、enactus）」、「大学学生寮徳聖寮」、「株式投資研究会」、「教育研究会」に所属していました。私のことを良く知る友人たちは、私のことを「疲れを知らない全力少年」、こう呼んでいました。



きっかけ

私が海外への渡航を考え始めたのは、大学2年生の時に出場した世界大会の日でした。所属するenactusという団体は、学生が地域コミュニティの抱える問題解決の為に、ビジネスの観点からプロジェクトを企画・実施する組織です。毎年、国内大会が開催され、さらに、各国の優勝チームが一堂に会し、英語でプレゼンテーションを行い競い合う世界大会が開催されます。

私達の滋賀大学チームは、2010年の国内大会に優勝し、世界大会へと駒を進めました。全40か国が参加するアメリカロサンゼルスで開かれた大会は、まさに「圧巻と衝撃」の連続でした。40か国協働で行われる文化交流のイベントでは、各国の生徒たちが自国の文化を際限なく講演します。楽器をならすアフリカメンバー、陽気に踊る北欧のチーム。私達日本チームも負けじと、男性は侍と忍者に扮し、女性は、セーラームーンとして、彼らと踊り続けました。

私たちのチームは予選突破して、日本勢初のベスト16という成績を修めました。しかし、決勝の舞台上で華やかに、そして荘厳に発表する彼らの姿は、当時の自分とは比べ物にならない程輝いていました。同世代の学生達の凄さに悔しさを感じると共に「彼らと肩を並べられるようになりたい」という渴望が湧き上がってきます。その日、私は「世界への挑戦」を心に決めました。



海外インターンシップの全体像

本大学には、AIESECという団体が存在します。この組織は、世界中にネットワークを持つグローバルな団体であり、学生が海外インターンシップを企画・運営する組織です。私は、このAIESECのプログラムに応募し、海外インターンシップに参加しました。「アフリカの実情を見て、他国の学生達の共にプロジェクト

を実施したい」、この目標を立てた私は、まず、マレーシアに2か月間滞在し、現地の福祉法人のNPOで研修を受けました。海外での滞在経験がこれまでほとんどなかったため、海外での適応力を身に付けることを視野に入れ、アジアで安定した成長を遂げているマレーシアに飛びました。

その後、3か月間、西アフリカのガーナという国での海外インターンシップに参加しました。現地NPOに所属し、小中学校の教師として勤務しました。さらに、NPO保有の私立図書館の改革・運営業務でプロジェクトリーダーを担い、4か国からなるメンバーを率いてきました。



ガーナでの図書館再建プロジェクト

着任当初は、図書館の利用者は数名しかおらず、その子達も食べ物を探りに来るだけでした。そんな時に、「図書館とは何なのか」について話し合う機会を創りました。「人々が平等に知識・文化・思想を学び、子ども達が想像力や多様な生き方を理解する場」、この定義を確認し、メンバーで議論が紛糾した時に、常に初志に立ち戻る精神の下、提案と改善に取り組むことを決めました。



そして、絵本の時間や英語の勉強講座を日替わりで開催するなど、学校に通うことが出来ない村の子ども達の勉強の機会を創っていきました。自分たちが工夫するほど、図書館を利用する子ども達も増え、当初は想像できなかったほど熱心に講座に参加するようになりました。異国の地で目標達成した貴重な経験となりました。そして、真実は現場にこそあるということ学びました。



研修を通じて学んだこと



グローバルリーダー。この言葉の持つ本当の意味に触れることが出来たことは、私の人生においてかけがえのない財産になりました。

最後に、私の帰国する前日にドイツ人から言われた “I’m inspired by you” という言葉。2010年の世界大会の舞台で目標にした「彼らと肩を並べられるような存在になりたい」、そんな姿に一步近づくことが出来たと実感した瞬間でした。



これからの未来を見据えて

世界は常に動き続けています。2020年に開催されるオリンピックも東京開催が決定し、グローバル化ということが如実に感じられる時代になってきました。何事も、やってみなければ始まりません。一歩を踏み出すからこそ価値があるのだと、大学生活を振り返って感じています。限られた時間の中で、際限なく走り続けてこられたのは、家族や親友たち、恩師である教授のおかげです。「世界を切り開くのはあなた自身だ」、皆さんの海外への一歩があなた自身の世界を大きく広げてくれます。

